

家庭の情景

—李清照「金石録後序」をめぐる—

西 上 勝

(中国文学)

— 李清照「金石録後序」

女流詞家として名高い李清照(1084-ca.1151)の「金石録後序」は、彼女の名で伝えられるわずか十篇足らずの散文の中ではもちろんのこと、中国の古典散文作品の中でも今日最も広く知られた作品の一つである。だがこうした高い評価が書き下ろされて直ちに与えられたということもできないようだ。李清照の死後ほど遠からぬ淳熙六年(1179)に、時の孝宗皇帝に上奏された呂祖謙編『皇朝文鑑』には、彼女の夫、趙明誠の友人であった劉跂の筆になる政和七年(1117)九月十日という紀年に加えられた「趙氏金石録序」(巻九十二)は収録されているが、李清照の文章はない。また同時代人の士大夫、洪邁(1123-1202)が、彼の筆記に「今、龍舒郡庫その書を刻するも、此の序は取られず」(『容齋四筆』巻五「趙德甫金石録」)と記すのに依れば、当時流布していた『金石録』にも李清照の文章は載せられていなかったことになる。劉跂のあとがきには、「食い違いを分析し、事実を極め真実を追求して、その言葉は明瞭、十分に閲読するに足る(別白抵牾、實事求是、其言斤斤、甚可觀也)。」と記され、趙明誠の著書が持つ学術的意義を高らかに顕彰している。これに対し、李清照の後序には、夫の著書のあとがきとして本来備えるべき内容と表現とは性質を異にするものが盛り込まれているのではないか、だからこそ彼女は劉跂のあとがきを受けて自ら筆を執ったのではないかと、まず予想することができる。

李清照「金石録後序」は伝来が複雑で、そのためにテキストの表記上の異同が多い。末尾の紀年も、『金石録』諸本に付録されるテキストではすべて「紹興二年(1132)、太歳が壬にある玄黙の歳、八月朔日甲寅の日(紹興二年、玄黙歳、壯月朔甲寅)」と記されている。しかし、この歳には甲寅にあたる日がない。しかも洪邁の筆記に節録されたテキストには、紹興四年(1134)李清照五十二歳の作と明記されている。このようにテキストの基本的性格に関わるような事項にもゆらぎを帯びている。他の伝記的情報も多くない。『宋史』には李清照の伝はなく、わずかに父、李格非の伝(巻四四四、文苑)の末尾に「女清照、詩文尤有稱於時、嫁趙挺之之子明誠、自號易安居士」と付記されるのみであり、李清照の一生を概観しようと

する際にはこの「金石録後序」を第一次資料とせざるを得ない状況にある。^{*1}この文章から李清照の略歴を抽出するならば、建中靖國元年（1101）に趙明誠に嫁し、靖康の変ののち建炎元年（1127）には金軍の侵攻を逃れ南方に避難、二年後の建炎三年八月に夫が病没、それから浙南地域を流浪した後、紹興二年（1132）春ようやく都、杭州に帰還し、このあとがきを執筆する機会を得た、ということになる。

文章は全体でほぼ一千九百字からなる。上に記した履歴項目に直接関わらない部分、すなわち劈頭「右『金石録』三十巻とは何であるか。（右金石録三十巻者何）」という一句で始まる部分、すなわち古物蒐集がいかに失われやすい空しい営みであるかを述べる冒頭の部分、それに「今日ふとこの本（『金石録』）を見てみると、まるで懐かしい人に会ったような気がする。（今日忽閱此書，如見故人）」と語り起こされ、「有があれば必ず無があり，聚があれば必ず散がある，それが道理というものだ。（有有必有無，有聚必有散，乃理之常）」という道理の提示で締めくくられる結びの部分、この前後二つの部分に費やされている字数は併せて三百八十字余り、文章全体の分量の四分の一にも達さない。文章全体から見れば僅かな部分しか占めないこの両端に置かれた文章で、亡夫が苦心して集成した書画金石のコレクションの意義とその運命を言うだけなら、すなわち『金石録』のあとがきとしてならば、本来十分な内容を備えたはずである。ところが李清照の文章は、あとがきとして十分な文章の倍以上の字数を費やし、かつ自らの履歴に引き寄せた形で、「細々と終始を記（區區記其終始）」しているのである。

先に挙げた洪邁の筆記『容齋四筆』とは、『容齋三筆』が完成した慶元二年（1196）六月から翌慶元三年（1197）九月に至る一年ほどの間に書かれた読書ノートを集成したものである。あわせて十四則の記事を収める巻五に、「趙德甫金石録」と題する一則が載せられたのだが、そこで洪邁が記録しようとするのは、趙明誠の『金石録』の方ではなくて、むしろ関心は李清照の後序に向けられているように見える。趙明誠の『金石録』については自序の中の言葉を簡単に摘んで言及した後、李清照についてこう述べられている。

その妻の易安李居士は、ふだんから夫と志を同じくし、趙（明誠）の没後は、かつての収蔵物が失われてしまったのを傷み悲しんで、あとがきを書き、変事に遭遇してきた一部始終を述べ尽くした。今の龍舒郡庫で刻せられた本には、あいにくこのあとがきは収録されていない。近頃王順伯のところでその原稿を見ることができたので、その梗概を書き出して置く。（其妻易安李居士，平生與之同志，趙沒後，愍悼舊物之不存，乃作後序，極道遭罹變故本末。今龍舒郡庫刻其書，而此序不見取，比獲見元稿於王順伯，因爲撮述大概云。)*²

彼はこれに続いて「金石録後序」の梗概を記録し、最後に次のような感想を書き留めている。

時に紹興四年、易安は年五十二歳であつた。自らこのように述べているが、私はその文を読んで心を痛めた、そこでこの筆記に記しておくことにした。(時紹興四年也、易安年五十二矣。自叙如此。予讀其文而悲之、爲識於是書。)

洪邁も李清照「金石録後序」に単なるあとがきから逸脱する部分があることを認め、その部分に魅力を感じていたことが分かる。それでは、自らの履歴に引き寄せた形で、「細々と終始を記(區區記其終始)」された部分には何がどう書かれてあるのか。以下に、先ずそれを読んでみよう。靖康の変勃発以前の生活を述べる前半は五百三十余字を費やして、夫趙明誠との結婚を契機に書画金石の蒐集に励んだ二人の共同生活のありさまが描かれる。^{*3}

私は建中辛巳の年、趙氏に嫁いだ。その時先君は礼部員外郎、丞相は吏部侍郎で、夫君は二十一歳、太学の学生であつた。趙と李の家柄は名族でなく、もともとつつましい生活をしていたので、毎月初めと月半ばの休暇には、いつも衣類を質に入れて五百文の銭を手にし、歩いて相国寺にゆき、碑文と果物を買った。帰ると、二人向かいあつて鑑賞しながら食べ、昔の葛天氏(古代の帝王)の頃のつつましくも平和に暮らしていた民びとのようね、と言ったものだった。二年後、夫が出仕すると、衣食はできるだけ切りつめ、遠方絶域を極め、天下の古文奇字を集め尽くす計画を立てた。月日と共に、次第次第が増えていった。丞相は中央政府に居られ、親戚知人には帝室図書館に勤務するものもあり、散逸した詩経の詩篇や史書、孔子旧宅壁中の書、汲郡の古墳中の簡書などまだ見ぬ書があつたため、遂に写し取るのに夢中になり、やがて妙味を覚えて、止められなくなってしまった。それからは古今の名人の書画、一代の奇器などを眼にすると、また衣類をかたに買い取つたものだった。今でも記憶しているが、崇寧年間(1102-1106)の頃のこと、ある人が徐熙の牡丹の図を所有していて、錢二十万でどうだと言つた。当時高貴の家の子弟でも、二十万という値では、簡単に工面できるものではなかつた。二晩手元に留め置いたが、結局手元不如意で返すしかなかつた。夫婦相向かい数日間悔しがつたものだった。それから郷里(青州。いまの山東省益都県)に十年引きこもり、あれこれ収入があつて、衣食にも余裕があつた。夫は続けて二つの郡の太守をつとめたが、その俸給はすべて、古書校訂につき込んだ。一書を獲得すれば、すぐ二人で校勘をおこない、整理をして標題を付ける。書画や古青銅器が手にはいると、撫でさすったり広げたり巻き納めたりして、きずを検分し、一晩に蠟燭一本が燃え尽きるのが慣わしだった。だから装丁は精緻、字画は完璧、収書家の第一位であつた。私は生まれつき記憶力に恵まれていたので、食事がすむと、帰來堂に坐して茶をいれ、うずたかく積み上げられた書物を指さして、あの事はあの本の何巻の何葉の第何行に有つたかなどと言つて、当たりかどうかで勝負をし、茶を飲む順番を決めた

ものだった。当たれば茶碗を挙げて大笑い、茶をふところにひっくり返して、かえって飲むこともできずに席を立つ始末、だがこうして老いていければよいと思った。だから憂患困窮にあっても、志を曲げることはなかった。収書が完成すると、帰來堂に書庫を設け、大きな本箱には目録を整え、書物をしまった。閲覧する際には、鍵を請け出し帳簿に付け、それから巻帙を探す。少しでも汚損すれば、必ず修復補正を要求され、以前のように気ままではいられなくなった。これでは快適さを追求して、逆に戦慄を獲得したようなもの、私の性分では耐えられず、それで食事からは肉を抜き、着物からは模様ものを抜き、首には宝石などの飾りを無くし、部屋には塗金刺繍の調度を無くして、百家の書で、字に欠損がなく、編集に誤謬のないものは、すぐにそれを買求めて、副本を備えることにしようと決心したのだった。もともと我が家では周易、左氏伝を家学としていたので、この二門に関わる文献は、最も備わることになった。こうしてテーブルにずらりと並び、枕元に無造作に重ねて、意にかなない心のむくまま、目を遊ばせ探求欲を満たし、その楽しみは音楽、色恋、ペットの愛玩にまさるものだった。（余建中辛巳、始歸趙氏。時先君作禮部員外郎、丞相時作吏部侍郎。侯年二十一、在太學作學生。趙李族寒、素貧儉、每朔望謁告出、質衣、取半千錢、步入相國寺、市碑文果實。歸、相對展玩咀嚼、自謂葛天氏之民也。後二年、出仕宦、便有飯蔬衣練、窮遐方絕域、盡天下古文奇字之志。日就月將、漸益堆積。丞相居政府、親舊或在館閣、多有亡詩逸史、魯壁汲冢所未見之書、遂盡力傳寫、浸覺有味、不能自己。後或見古今名人書畫、三代奇器、亦復脫衣市易。嘗記崇寧間、有人持徐熙牡丹圖、求錢二十萬。當時雖貴家子弟、求二十萬錢、豈易得邪。留信宿、計無所出、而還之。夫婦相向惋悵者數日。後屏居鄉里十年、仰取俯拾、衣食有餘。連守兩郡、竭其俸入、以事鉛槧。每獲一書、即同共勘校、整集籤題。得書畫彝鼎、亦摩玩舒卷、指摘疵病、夜盡一燭爲率。故能紙札精緻、字畫完整、冠諸收書家。余性偶強記、每飯罷、坐歸來堂烹茶、指堆積書史、言某事在某書某卷、第幾葉第幾行、以中否角勝負、爲飲茶先後。中即舉杯大笑、至茶傾覆懷中、反不得飲而起。甘心老是鄉矣。故雖處憂患困窮、而志不屈。収書既成、歸來堂起書庫大櫥、簿甲乙、置書冊。如要講讀、即請鑰上簿、關出卷帙。或少損污、必懲責措完塗改、不復向時之坦夷也。是欲求適意而反取慘慄。余性不耐、始謀食去重肉、衣去重采、首無明珠翡翠之飾、室無塗金刺繡之具、遇書史百家字不刊缺、本不訛謬者、輒市之、儲作副本。自來家傳周易、左氏傳、故兩家者流、文字最備。于是几案羅列、枕席枕藉、意會心謀、目往神授、樂在聲色狗馬之上。）

ここには、結婚して以来、二人が家庭内で終始書画金石の蒐集整理に精励してきたこと、そうした生活に埋没してすべての精力を費やすことに歓喜と幸福を覚えていたことが再現されている。ある士大夫の家庭で生起しえた幸福な時間に形が与えられているのである。「葛天

氏の民」になぞらえる幸福、「聲色狗馬」を上回るものであったという快樂は、たとえ方としてはなおやや生硬な表現である。しかしそのぎこちない表現からは、それらが今ではすべて失われた儚いものに過ぎず、書き手が記憶しているのはむしろ時々の蒐集にかかる興奮や哀歎、蒐集物をめぐって行われた家庭内の遊びの一つ一つの情景そのものであることがうかがえる。だが、この幸福な家庭生活は時代の嵐の前にあっけなく潰え去ってしまう。家庭外の出来事が如何に自らが築き上げた幸福を打ち崩していったかが、この後続いて克明に記録されていく。

靖康丙午の歳（1126）、夫君が淄川（山東省淄川県）の知事になられたとき、金軍が都に侵入したと聞いた。まわりを見渡して茫然とし、箱や手箱にいっぱいのものに、かつは恋々とし、かつは胸痛め、きっと我が物ではなくなるのだろうという予感がした。建炎丁未（元年、1127）の年の春三月、姑の葬儀のため急ぎ南下することになった。余分な物まで載せられないので、まず書物の中の版型の大きな物を除外し、次に絵画の幅数の多いものを除き、次に古器の中で款識のない物を除いた。その後さらに官版書、普通の絵画、重い器物を除いた。こうして次々減らしても、依然として書物は車十五台になった。東海（江蘇省東海県）まで来ると、舟を連ねて淮河を渡り、さらに長江を渡って、建康（江蘇省南京市）についた。青州の屋敷にはまだ書冊や什器が、十あまりの部屋に保管してあり、次の年の春にもう一度船を設えて積んでくるつもりでいた。が、十二月、金軍が青州に侵攻、その十あまりの部屋の物は、すべて灰になってしまった。建炎戊申（二年、1128）の秋九月、夫君は喪が明けて建康府の知事になられたが、己酉（建炎三年、1129）の春三月には辞され、舟で蕪湖（安徽省蕪湖市）に上り、姑孰（安徽省当塗県）に入り、贛水のほとりに居を構えることにした。夏五月、池陽（安徽省貴池県）に来たとき、湖州知事の辞令を受け、都に上り皇帝に拝謁されることになった。そこで一家を池陽に止めたまま、単身で招集に応じられた。六月十三日、荷物を背負い、舟から岸に上がって腰掛けたとき、粗末な上着にあみだにかぶった頭巾、精気は虎の如く、眼光爛爛と人を射、舟に向かって別れを告げられた。私は嫌な予感がして、大声で『もしこの町に危険が迫ったら、いかが致しましょう。』といった。手を振り上げ遠くから『皆に従え。やむを得なくなったら、まず家財を捨てよ、次が衣類、その次は書冊と巻物、その次が古器、先祖の位牌だけは、自分で抱えて、死ぬまで離すな、忘れるんじゃないぞ。』という返事。そうして馬を駆って行ってしまった。途中大急ぎで馬を走らせ、酷暑を冒し、病気にかかった。行在所に着いたとき、熱病におかされた。七月末、手紙で病に伏せていると知らせがあった。私は驚き恐れた、夫君はもともとせっかちな性分だ、どうしたものか。熱病に罹って熱が上がると、きっと熱冷ましを服用するだろうが、それではますますひどくなる。そこで舟のとも綱を解いて川を下

り、一昼夜三百里を進んだ。着いてみると、やはり柴胡、黄芩などの薬を大量に服用して、熱に加えて下痢までして、病状は危険な状態になっていた。私は悲しみの涙にくれ、あたふたして後の事をたずねることもできなかった。八月十八日、ついに起き上がれなくなり、筆を取り詩を作り、書き終わると亡くなられた、死後の事は何も言い残されなかった。葬儀は終わったが、私には身を寄せる所がない。朝廷ではすでに後宮の人々を分散させていたし、長江も渡航禁止という噂だった。その時まだ書籍二万卷、金石の拓本二千巻、食器や寝具は百人の来客に対応できるだけのものがあつたし、ほかの家具もそれに見合うだけの数があつた。私までもが大病を患い、かろうじて息をしている有様。情勢は日々緊迫の度を加えていた。夫君には妹婿に当たり、兵部侍郎の官にあつて、皇太后の護衛をして洪州（江西省南昌市）にいる人があることに思い当たり、昔からの部下二人を使いに出し、先に一部荷物を送り身を寄せようと考えた。冬十二月、金軍が洪州を落とし、すべては水の泡となった。あの舟を連ねて長江を渡って来た書物も、雲煙となってしまった。わずかに小さな巻軸の書帖、写本の李杜韓柳の文集、世説新語、塩鉄論、漢唐の石刻の副本数十軸、三代の鼎彝十数点、南唐の写本が数箱だけであつた。たまたま病中の慰みとして、寢室に持ち込んでいた物だけが、やっと残るだけとなったのである。長江上流にはもう進めず、敵の勢いも予測しがたいものがあつたので、弟の迓（こう）が勅令局の刪定官をしていたので、そこに頼ることにした。台州（浙江省臨海県）に着くと、知事はすでに逃亡していた。剡（浙江省嵊県）に向かい、上陸し、衣類などを捨て、黄巖（浙江省黄岩県）に逃げ、舟を雇って海に出、行宮に駆けつけた、当時仮御所は章安（浙江省臨海県東南）にあつたのだが、それから御船の後について温州（浙江省温州市）に行き、それからまた越州（浙江省紹興市）に行った。庚戌（建炎四年、1130）の年十二月、百官の解き放ちがあり、そこで衢州（浙江省衢県）に逃げた。紹興辛亥の年（元年、1131）春三月、再び越州に行った。壬子（紹興二年、1132）の年、今度は杭州（浙江省杭州市）に行った。亡夫君の病気が重かつた時、張飛卿という学士が、玉の壺を携えて見舞いに来たことがあつた。そのまま持ち帰っていったが、それが大変な宝玉だった。誰が言いふらしたか、お上りが買い上げられるとの噂が広がり、また密かに弾劾の準備が進められていると聞こえてきた。私は恐惶し、申し開きもしないまま、家中の銅器などの器物を、朝廷に寄進するつもりだった。越州に来たとき、皇帝はすでに四明（浙江省寧波市）に移られていたので、家中には止め置かず、写本と一緒に剡に預けておいた。そのあと官軍が反乱兵を捕らえたとき、持ち去られ、そっくり前の李將軍の家に収まったと聞いた。やっと残っていた物も、こうして十のうち五、六は無くなってしまった。四十箱足らずの書画硯墨だけは、もう他に置いておけず、常に寢台の下に置いて、自分の手で出し入れしていた。会稽（浙江省紹興市）にいたとき、当地の鍾氏の屋敷に住んでいた。ある晩、壁の穴から五つの箱が持ち去られた。

私は悲しみ堪えきれず、懸賞金を出して買い戻そうとした。二日後、隣人の鍾復皓が十八軸を持ち報償を求めた。それで盗人は近くにいと知れた。いろいろ手は尽くしたが、その他の物はついに出てこなかった。今になって、それらは転運判官の呉説が安値で手に入れたことが分かっている。やっと残っていた物は、とうとう十のうち七八が無くなり、有る物といえば、一二の不完全な書冊、数種類の平凡な書帖に過ぎぬが、そんなものでも自分の頭や目のように愛おしんでいる、何と愚かなことであろうか。(至靖康丙午歳、侯守淄川、聞金寇犯京師。四顧茫然、盈箱溢篋、且戀戀、且悵悵、知其必不爲己物矣。建炎丁未春三月、奔太夫人喪南來。既長物不能盡載、乃先去書之重大印本者、又去畫之多幅者、又去古器之無款識者。後又去書之監本者、畫之平常者、器之重大者。凡屢減去、尚載書十五車。至東海、連鱸渡淮、又渡江、至建康。青州故第尚鎖書冊什物、用屋十餘間、期明年春再具舟載之。十二月、金寇陷青州、凡所謂十餘屋者、已皆爲煨燼矣。建炎戊申秋九月、侯起復知建康府。己酉春三月罷、具舟上蕪湖、入姑孰、將卜居贛水上。夏五月、至池陽。被旨知湖州、過闕上殿。遂駐家池陽、獨赴召。六月十三日、始負擔、捨舟坐岸上、葛衣岸巾、精神如虎、目光爛爛射人、望舟中告別。余意甚惡、呼曰『如傳聞城中緩急、奈何。』戟手遙應曰『從衆。必不得已、先棄輜重、次衣被、次書冊卷軸、次古器、獨所謂宗器者、可自負抱、與身俱存亡、勿忘之。』遂馳馬去。塗中奔馳、冒大暑、感疾。至行在、病店。七月末、書報臥病。余驚但、念侯性素急、奈何。病店或熱、必服寒藥、疾可憂。遂解舟下、一日夜行三百里。比至、果大服柴胡、黃芩藥、瘧且痢、病危在膏肓。余悲泣、倉皇不忍問後事。八月十八日、遂不起。取筆作詩、絕筆而終、殊無分香賣履之意。葬畢、余無所之。朝廷已分遣六宮、又傳江當禁渡。時猶有書二萬卷、金石刻二千卷。器皿茵褥、可待百客、他長物稱是。余又大病、僅存喘息。事勢日迫。念侯有妹壻、任兵部侍郎、從衛在洪州、遂遣二故吏、先部送行李往投之。冬十二月、金寇陷洪州、遂盡委棄。所謂連鱸渡江之書、又散爲雲煙矣。獨餘少輕小卷軸書帖、寫本李杜韓柳集、世說、鹽鐵論、漢唐石刻副本數十軸、三代鼎彝十數事、南唐寫本書數篋、偶病中把玩、搬在臥內者、巋然獨存。上江既不可往、又虜勢叵測、有弟迓任勅局刪定官、遂往依之。到台、台守已遁。之剡、出陸、又棄衣被、走黃巖、雇舟入海、奔行朝、時駐蹕章安、從御舟海道之溫、又之越。庚戌十二月、放散百官、遂之衢。紹興辛亥春三月、復赴越。壬子、又赴杭。先侯疾亟時、有張飛卿學士、攜玉壺過視侯、便攜去、其實珉也。不知何人傳道、遂妄言有頒金之語。或傳亦有密諭列者。余大惶怖、不敢言、遂盡將家中所有銅器等物、欲赴外廷投進。到越、已移幸四明、不敢留家中、並寫本書寄剡。後官軍收叛卒、取去、聞盡入故李將軍家。所謂巋然獨存者、無慮十去五六矣。惟有書畫硯墨可五七篋、更不忍置他所、常在臥榻下、手自開闔。在會稽、卜居土民鍾氏舍。忽一夕、穴壁負五篋去。余悲慟不已、重立賞收贖。後二日、鄰人鍾復皓出十八軸求賞。故知其盜不遠矣。萬計求之、其餘遂不可出。今知盡爲吳說運使賤價得之。所謂巋然獨

存者、迺十去其七八，所有一二殘零不成部帙書冊，三數種平平書帖，猶復愛惜如護頭目，何愚也耶。）

諸収蔵家に冠たる青州の膨大なコレクションが、船を連ねて川を渡る頃には車十五台になり、それが寢室に持ち込める分量になり、さらにその過半を失い、ついにはその八割方まで喪失して、現在自分が保有するのはわずかに「一二の不完全な書冊，数種類の平凡な書帖」に成り果ててしまったこと、この惨めな経過が年を追って執拗に記録されている。この九百字を超える部分は、いかに自分が持てる物を次々と喪失する状況に追い込まれたか、息を接ぐのももどかしいと云わんばかりの切迫した勢いで書き連ねられており、前段に見られたような生硬な比喻による一般的評価を加えるゆとりすら書き手は持っていない。読み手にとっては、一部脈絡が失われかけていて、書き手の体験をなぞるのに困難を覚えざるを得ない部分すら現れている位だ。⁴だがこうしてかりそめの幸福があえなく失われた次第、「变故に遭罹する本末を極道」した物語が形を得た。それは単なるあとがきに終わらず、新たな感動を呼び起こす力を持ったのである。新たな文学的価値を、李清照「金石録後序」が持ち得ていることは、洪邁から現代中国の文学史家まで一貫して支持されてきている。

清の葉昌熾（1847-1917）は『藏書紀事詩』（巻一）に、五代の毋昭裔から始まる蔵書家の系譜に趙明誠・李清照夫妻を加え、その蔵書の特長を李清照の「後序」に基づいて、「部帙を成さずして但だ平平たり、漆室に燈昏くして百感生ず。安くんぞ得ん歸來堂上に坐して、放杯一笑茗甌の傾くを。」と総括して見せた。葉昌熾が摘出して見せたように、李清照の文章を読んで、靖康の変以降の浙西地方における悲惨な流浪生活と、陶淵明「歸去來兮辭」に因んで書齋を「歸來堂」と命名し自らも「易安室」と号しもしたであろう青州退居時の幸福な生活、前後二つの生活の明暗鮮やかな対比に先ず目を奪われる。青州退居時に代表される幸福な家庭生活とは、夫と趣向を同じくし、それが原因となってもたらされた平穩にして円満な夫婦生活のことであるとこれまで言われてきた。李清照「後序」は、明代以降に流布して広く知られるようになるが、明代中期に生きた在野の読書人・郎瑛（1487-?）の次の意見は、そうした家庭生活のとらえ方をはっきりと述べるものである。

趙明誠、字德甫、清獻公の次男、『金石録』一千巻を著した。その妻李易安もまた文芸に秀でた婦人の中で傑出した者で、夫と同じく博く古代をたずね新奇をきわめて、その文は清婉、詞集『漱石集』があつて世に流布している。色々な書物に、夫と志を同じくして、それで親愛の極みにあつたというけれども、私も「後序」を見て、なるほどその通りだと思った。ただ一体どうして張汝舟などに再び嫁すようなことがあつたのだろうか。ああ！これではあの（胡人に囚われて子を産んだ）蔡琰とどれほどの違いがあろう。それも女色が

人の本性をねじ曲げたものであり、あの才人・蔡邕といえども免れ得なかったのだ。(趙明誠字德甫，清獻公中子也。著『金石錄』一千卷。其妻李易安，又文婦中傑出者，亦能博古窮奇，文詞清婉，有漱石集行世。諸書皆曰與夫同志，故相親相愛之極。予觀其叙金石錄後，誠然也，但不知胡爲有再醮張汝舟一事。嗚呼，去蔡琰幾何哉。此色之移人，雖中郎不免。)『七修類稿』卷十七「李易安」*5

張汝舟と再嫁した，とここで郎瑛が触れるのは，張汝舟の官としての不正を李清照が告発し，また夫を告発したことで彼女自身も罪を問われることになった紹興二年（1132）に起こった事件を指している。時の翰林学士の慕崇禮が，李清照を弁護する文を書き残していることから事実らしい。郎瑛は，「後序」には全く言及の無かったこの事件を持ち出し，婦人としての李清照の身の振り方を男性本位の伝統的道德観に基づいて評価している。そうすると，親愛の極みにあったという言葉は，女の身でありながらよく夫の志向を理解し得たものだ，という郎瑛の男性本位の家庭観から発せられたものであるように見えてくる。こうした態度は恐らく郎瑛に限らず，歴代の男性評者が李清照の業績に対し繰り返し表明してきた見解に付きまわっているもの*6だが，こうした家庭観に追随してしまうと，蒐集に伴う歓喜と喪失がもたらした悲哀，作品を彩るこの二つの激しい情動が作り上げる緊迫感をよく理解できなくなってしまいうように思う。「後序」には，士大夫家庭に生活する婦人が夫をパートナーとして蒐集に勤しむことができた喜びと，努力して蒐集した成果をあえなく喪失してしまった悲しみは表出されてはいても，郎瑛の見方からすれば表出されていてもおかしくない，夫から教えや労りを受けた歓喜や夫の遺志を遵守し得なかった後悔などは，全く記されていないのである。この文章がもつ緊迫感はどこから生まれたのだろうか。その生成の根源は文章の成り立ちそのものに求められるべきだ。金石書画の収集の意義を説く文章，士大夫家庭における婦人の果たす役割を説く文章，この二つの表現領域における文学的類型から逸脱するところが李清照「金石録後序」には存在する。その文学的系譜からの離脱こそが，単に幸福な家庭生活の物語以上の一種張りつめた風格をこの文章に付与しているのではないか。そうした立場から，以下に詳しく検討を加えてみることにしたい。

二 士大夫と書籍書画金石

李清照が「後序」で表現した書籍古物への愛着は，同時代の文学的環境の中ではどんな位置を占めるものであったのだろうか。『金石録』という著書の完成に至る経緯とその意義については，夫趙明誠が序文を書き，すでに自ら次のように述べていた。

私は子供の頃から当時の学者や士大夫のもとで過去の金石に刻まれた言葉をたずね、見聞を広めるのを好んだ。後に歐陽文忠公の『集古録』を入手し、読んで感心し、世に伝わる誤りを正し、後学に益すること甚だ大であると思った。ただまだ漏れがあり、また年月の順序が無いので、それを増補して一書を成し、世の学ぶ者に伝えようと考えた。そこでさらに広く蒐集し、だいたい二十年でおおよそのところが備わった。上は三代から、下は隋唐五代まで、近くは都から、遠くは四方の絶域異国に至るまで、文字を創造した倉頡以来の古代文字、大小二篆、八分隸行草各種の書、鐘・鼎・簠・簋・尊・敦・甗・鬲・盤・杆の銘文、詞人墨客の詩歌・賦頌・碑志・叙記の文章、名卿賢士の功績や事跡、はては仏教や道教の言い伝えに至るまで、おおよそ古物奇器や巨碑大刻に載せるもの、文章や字画の一部のみが摩滅をのがれて僅かに残るもの、これらをもれなく集めた。そこで順序をつけて二千巻としたが、私のここに費やした精力は、勤勉にして長期にわたると言えるだろう。ただ細々と玩弄のためだけの道具としてきたわけではないのだ。（余自少小喜從當世學士大夫訪問前代金石刻詞以廣異聞。後得歐陽文忠公『集古録』，讀而賢之，以爲是正譌謬，有功於後學甚大。惜其尚有漏落，又無歲月先後之次，思欲廣而成書，以傳學者。於是益訪求藏蓄，凡二十年而後粗備。上自三代，下及隋唐五季，內自京師，達於四方遐邦，絕域夷狄。所傳倉史以來古文奇字，大小二篆，分隸行草之書，鍾鼎簠簋尊敦甗鬲盤杆之銘，詞人墨客詩歌，賦頌碑誌敘記之文章，名卿賢士之功烈行治，至於浮屠老子之說，凡古物奇器豐碑巨刻所載，與夫殘章斷畫磨滅而僅存者，略無遺矣。因次其先後爲二千卷。余之致力於斯，可謂勤且久矣。非特區區爲玩好之具而已也。）*7

この後さらに史伝の誤りを正さんがために『金石録』を著作したのだと強調され、趙明誠の序文は締めくくられている。ありとあらゆる遺物をもれなく蒐集する営みは、単に収集欲を満たすためにのみ続けてきたのではなく、歴史を再検討するための資料を整えるためだったのだと、彼は主張するのである。友人、劉跂が趙明誠『金石録』のために書いたあとがきでも、その営為が単に蒐集欲を満たすばかりのものなどではなく歴史的意義を有する事業なのだ、と趙明誠と同じようにこう力説している。

金石に刻まれたものはその当時に作られたものなのだから、当事者はその事実に関わっており、虚偽や想像が入り込む余地のないことは、明々白々である。前人は大いに勤め慎み深くして、未来に記録を託したが、それはひたすら永遠にまで達することがないのを恐れてのことだったし、古代を愛好する士の方も、寝食を忘れて探求するのは、いつも不十分なのを気にかけているためであって、決してただ玩弄の具とするためなどではないのだ。

（惟金石刻出於當時所作，身與事接，不容偽妄，皎皎可信。前人勤渠鄭重，以遺來世，惟

恐不遠，固非以爲夸，而好古之士，忘寢廢食而求，常恨不廣爾，豈專以爲玩哉。）*8

古物蒐集とはすなわち歴史的事業にほかならない，という趙明誠や劉跂のこうした主張は，実は趙明誠の模範とした歐陽脩（1007-1072）『集古録』が第三者から受けてきた評価と全く同じものである。『集古録』という著作が持つ意義は，歐陽脩の終生にわたる知的営みの一つとして，次のような評価を受けてきていた。

先君は生前嗜好されるもの少なく，どんなに珍しい物でもさほど愛惜されることはなかったが，古代の文字や書籍を収蔵することだけは好まれ，三代以来の金石の銘文を集めて一千巻とし，史伝百家の誤った説を多く正された。（先公平生於物少所嗜好，雖異物奇玩不甚愛惜，獨好收蓄古文圖書，集三代以來金石銘刻爲一千巻，以校正史傳百家訛謬之説爲多。）歐陽發等述「先公事迹」

歐陽脩は博く群書を極め，学を好んで倦むことがなかった。三代以来の金石刻文を集めて一千巻とし，多数の歴史家の誤った説を訂正するところが多い。（修博極群書，好學不倦。集三代以來金石刻爲一千巻，校正史氏百家譌謬之説爲多。）『神宗實録』墨本

歐陽脩は三代以来の金石刻文を集めて一千巻とし，よく誤謬を正した。（修集三代金石刻爲一千巻，頗是正譌謬。）『重修實録』朱本

かねてから三代以来の金石刻文を集めて一千巻とし，よく誤謬を正した。（嘗集三代金石刻爲一千巻，頗是正譌謬。）『神宗舊史』

古を好んで学を嗜み，周漢以降の金石遺文，断篇殘簡，すべてを集め，異同を検討し，自説をその左に掲げ，明快に考証をすすめ，これを集古録と名付けた。（好古嗜學，凡周漢以降金石遺文，断篇殘簡，一切掇拾，研稽異同，立説於左，的的可表證，謂之集古録。）『四朝國史』淳熙間進

歐陽脩自身もまた『集古録』がほぼ備わった嘉祐七年（1062）*9にその序文を執筆し，編纂の経過と意図を述べる次のようなくだりを書き加えていた。

その大要を掻い摘んで述べ，別に目録をつくり，そうして併せて史伝を補い誤りを正すものを載せ，後学に伝えて，見聞を広めるよすがにしたい。（撮其大要，別爲録目，因并載夫可與史傳正其闕謬者，以傳後學，庶益於多聞。）「集古録目序」『居士集』卷四十一*10

ただ歐陽脩の自序は、自分の営みの実用性を主張するだけに終わらず、それよりもこの営みがいかに自らの性分に根ざし心から愛好するものであったかを述べ尽くすことにむしろ主眼が置かれている。実用性に言及するこのくだりを書くに先立ち、歐陽脩は古物愛好が自分の資質に即した一徹なものなのだとこう述べる。

いったい力があることは好むことには及ばず、好むことは専一であることには及ばないものだ。私は愚かな性分で古代に心惹かれ、世人が欲するものに対しては全く気持ちが向かわないため、自分の愛好を専一にすることができた。愛好の度合いが高まれば、力が足りなくても、なんとか手に入れることができるのだ。（夫力莫如好，好莫如一。予性顛而嗜古，凡世人之所貪者皆無欲於其間，故得一其所好於斯。好之已篤，則力雖未足，猶能致之。）

自分を自分たらしめている愛好の肯定、これがこの歐陽脩の文章に、著作の実用性をひたすら主張するだけに終始する第三者の評価や趙明誠の自序には見あたらない表現の奥行きを付与している。そして自らの愛好に埋没しきってしまう事態が非難を招く恐れがあることも、歐陽脩はあらかじめ予想していた。他者からの非難に答えつつ新たな自己規定を試みるための弁明を試みる際に決まって活用される伝統的修辭法に依りつつ、自己弁護を試みてこの文章は結ばれている。

ある人が私を非難して「物が多くなるといきおい所有するのが困難になるもの、所有して長くなれば散逸せずにはすまないもの、それなのにどうしてこんなことにあくせくするのですか。」という。私は答える。「私の愛好を満たし、それで遊んで年老いていくことができればいいのです。象牙，サイの角，黄金，宝石を所有していても，散逸しないですむものでしょうか。私はとてもこれをあれに取り替えることなどできません。」（或譏予曰「物多則其勢難聚，聚久而無不散，何必區區於是哉。」予對曰「足吾所好，玩而老焉可也。象犀金玉之聚，其能果不散乎。予固未能以此而易彼也。」）

士大夫の隱逸生活においては、書物を主とするいわゆる文化的事物に対する愛好は、陶淵明以来の文学的伝統を持つ。老境という隱逸生活への傾斜を帯びる個人的空間の内部、この条件の下では古物蒐集に対する愛着も是認されてしかるべきだと歐陽脩は弁明する。晩年、彼が六一居士を名乗る時、その名の由来を説いた「六一居士傳」では、蔵書や金石遺文が自分に対置させられ、望ましい生活に欠かせぬ物の一つとしてさらに積極的に位置づけられるようになるのである。^{*11}

個人的空間に身を置いている士大夫に対して快樂をもたらす事物としての書物，そういう

文学的認識は司馬光（1019-1086）にも受け継がれていた。熙寧年間の新法推進時代、司馬光は熙寧四年（1071）に洛陽に閑居し、翌々年熙寧六年二十畝の土地を購入し園庭を造成する。園庭には蔵書五千巻を擁する讀書堂を始めとする七つの建造物が設置された。司馬光は自らを「迂叟」、すなわち「世間の事情に疎いという差異を持つが故に存在意義のある老人」*12と名乗りつつ、この園庭に「独樂園」と命名した理由を次のように説く。

迂叟は普段は多く堂中にいて読書する。上は聖人を師匠とし、下は群れいる賢者を友として、仁義のみなもとを究明し、制度の本源を探って、形あるものが生まれる前の原始から、四方に果てしなく伸びる遠方に及ぶまで、事物の理が、挙げて目前に集まってくる。問題は自らの学識が不十分なところにあって、他人に求めたり、外界に期待したりはしない。心が倦み体が疲れば、竿を取って魚を釣り、布を手に藁草を摘み、溝を掘って花に水をやり、斧をふるって竹を割り、湯を注いで手を洗い、高きに臨んで目を遊ばせ、ゆったりと散策して、ただ快適さを求める。明るい月が時とともに現れ、清らかな風が吹き寄せる、動いていて引きずられることも、止まっていて止められることもなく、耳目肺腸が、すべて自分の物となる。一人きりで、のびのびと、この世界にこれに代わりうる快樂が他にあるか。それでこれらを合わせて独樂園と命名したのである。（迂叟平日多處堂中讀書，上師聖人，下友群賢，窺仁義之原，探禮樂之緒，自未始有形之前，暨四達無窮之外，事物之理，舉集目前。所病者學之未至，夫又何求於人，何待於外哉。志倦體疲，則投竿取魚，執枉采藥，決渠灌花，操斧剖竹，濯熱盥手，臨高縱目，逍遙相羊，唯意所適。明月時至，清風自來，行無所牽，止無所柅，耳目肺腸，悉爲己有。踴躍焉，洋洋焉，不知天壤之間復有何樂可以代此也。因合而命之曰獨樂園。）「獨樂園記」『司馬公文集』卷六十六*13

ここに述べられている快樂は、対社会的効用をはっきりと意識し明確な目的をもった内発的な営為に伴うものであって、書籍そのものやその獲得喪失に執着しようとするものではない。実際、李格非の記すところによれば、司馬光の独樂園は当時洛陽にあった諸園庭とくらべものにならないほど卑小であったのにもかかわらず人々の尊崇の対象となったという*14。それは、司馬光自身が表現しようとしたように、物に拘らない高い精神性が共感を持って同時代の士大夫に受容されたことを示す。現代に生きる我々にも、書き手の気高い志をこの文章に読み取ることは可能だ。物に拘っていないことが明らかであるにもかかわらず、司馬光は、自分が一人きりの快樂に没入することに対する他者からの非難に、あらかじめ答えておこうと試みる。歐陽脩が採ったのと同じ修辞手法を用いて、次のように言葉をつぐのである。

ある人が迂叟を非難して言った。「私は君子が楽しむものは、必ず人々と共にすると聞き

ます。ところが今、あなたは自分一人が満足を得て、他人と分かち合おうとされませんが、それでいいのでしょうか。」迂叟はわびて言う。「私は愚かでどうして君子にならうことなどできましょう。自分一人楽しんででも足りないかと危ぐしているのに、人に及ぶわけがありません。それに私の楽しみとするものは、粗末で下品、世の捨てて顧みないところです。人に押しつけても、人は受け取ろうとはしない、どうして無理強いができるのでしょうか。もしもこの楽しみを同じくしてもよいという人がいたら、伏し拝んで差し上げましょう。どうして占有することなどありましようか。」（或答迂叟曰「吾聞君子所樂、必與人共之。今吾子獨取足於己、不以及人、其可乎。」迂叟謝曰「叟愚何得比君子。自樂恐不足、安能及人。况叟之所樂者、薄陋鄙野、皆世之所棄也。雖推以與人、人且不取、豈得強之乎。必也、有人肯同此樂、則再拜而獻之矣。安敢專之哉。」）

一人読書に耽りそこから快楽を得ようとするのも、歐陽脩の金石遺文に対する価値付けと同じように、時流に沿わないものなのだと低く価値付けをする。歐陽脩が一人そこで老いていくだけのささやかな快楽である故に許容されるべきだと弁解するのと同じように、司馬光も隠逸生活に身を置いている世間知らずな老人である私に許されたささやかな個人的快楽の一つにすぎないのだと弁明を試みているのである。こうした歐陽脩や司馬光の語り口からすれば、老いや隠逸といった条件が見あたらない状況下においては、士大夫が書籍や書画に向かう場合、単純な獲得喪失に伴う歓喜や悲哀は文学的なテーマとして取り上げられにくい環境が出来上がっていたのではないか。それを窺わせるに足る作品として、熙寧十年（1077）蘇軾が、画家であると同時に著名な絵画蒐集家でもあった年来の友人・王詵（1048頃-1104以降）が建造した収蔵庫「宝絵堂」のために書き与えた縁起がある。蘇軾は、物の獲得喪失に血眼になる態度を「留意」とし、そうした執着から免れている態度を「寓意」と呼んで区分する。様々な物の中で人に快楽を与えながら、人の本性を変えることのない物の代表が書画であるが、その書画ですら執着を解くことができずに、災厄を蒙った例は数多い。秘伝の筆法を求めて血を吐き他人の墓を暴くような事までした魏の鍾繇、書の腕前をめぐる確執した宋の孝武と王僧虔、戦役の最中に収蔵品を載せる小舟を走らせて嘲笑された晋の桓玄、書画を壁の中に隠しながら空しくそれを失った唐の王涯、彼らはみな「留意」が原因となって災いに見舞われたと述べ、続けて蘇軾は自らの体験を回顧しつつそうした災いから逃れる術をこう説くのである。

私は幼少の頃、書と画の二つが好きで、家にある物は、ただひたすらそれを失うのが恐ろしく、他人が所有するものは、ただただ私の物にならないのを恐れていた。そうしているうち馬鹿馬鹿しくなった。「僕は富貴に薄いのに書には厚く、死生を軽視して絵画を重ん

じている。これは本末転倒してしかるべき考え方を失っているのだ。」こう考えてからは、好きではなくなった。見ていいと思う物は時にはそれを取っておくこともあったが、人が持ち去るに任せて、もう惜しいとは思わなかった。それはたとえば雲霧が目を通り、鳥たちのさえずりが耳に入るようなもので、それに接するのを楽しむだけで、無くなったところで気にも止めない。こうしてこの二物は常に私の楽しみとなり私の苦痛にはならなくなったのだ。(始吾少時、嘗好此二者、家之所有、惟恐其失之、人之所有、惟恐其不吾與也。既而自笑曰「吾薄富貴而厚於書、輕死生而重於畫。豈不顛倒錯繆失其本心也哉。」自是不復好。見可喜者雖時復蓄之、然爲人取去、亦不復惜也。譬之煙雲之過眼、百鳥之感耳、豈不忻然接之、然去而不復念也。於是乎二物者常爲吾樂而不能爲吾病。)'『東坡集』卷三十二*15

どこにでもある自然の風物に接するのと同じように書画にも対すべきであって、特別な構えは不要だという蘇軾の忠告には、物そのものに向かう思いではなくて、物に対する主体自身の態度を快樂の源泉としようとする意図が見える。これより先、杭州通判から知密州に転じた蘇軾は、熙寧年八年(1075)官舎の近くにあった築山を補修して展望台とし、弟の蘇轍の提案に従い「超然臺」と名付けた。その命名の縁起を述べる文章の最後に記された言葉は、「私がどんなところに行こうといつでも楽しんでいられるのは、物の外側に抜け出して遊んでいるからだ。(余之無所往而不樂者、蓋遊於物之外也。)*16というものであった。書画という物に対しても、その物に引きずられるのではなくて、その外側に出て楽しむことが何よりも大切だと、「宝絵堂記」でも蘇軾は王詵に忠告しているのである。

蘇軾の時代に先立つこと二百年、唐の張彦遠(815?-875?)が著した絵画鑑賞手引き書『歷代名畫記』には、書画蒐集が忘我的快樂をもたらすものであることが、自らの体験に依りながら直截に表現されていた。

私は若い頃から、遺物の蒐集につとめ、鑑賞玩味し装幀を整え、日夜励んできた。手に入れられる宝があれば、いつも粗末な衣服まで質に入れ、貧しい食事をさらに減らすまでした。家族や召使いたちは、くすくすと嘲笑する。ある人など「一日益体もないことに費やして、一体何か足しになることでもあるのか。」と言う。それを聞くと私は嘆かわしく思う。「益体もない事でもしないことには、限りある生を楽しむことなど出来はしないじゃないか。」こういう風に愛好は益々深まり、ほとんど性癖にまでになった。早朝清らかな窓辺で、窓から竹や松を眺めつつ、富貴を軽んじ、ほんの僅かな家財で十分、この身一つのほかには、取り立てて言うほどの物を持たないが、ただ書画だけは、忘れられないでいる。まるで酔ってしまったかのように言葉も忘れ、ただ鑑賞することをひたすら楽しむのであ

る。（余自弱年，鳩集遺失，鑑玩裝理，晝夜精勤。每獲一卷遇一幅，必孜孜葺綴竟日。寶玩可致者，必貨弊衣，減糲食。妻子僮僕，切切嗤笑。或曰「終日爲無益之事，竟何補哉」既而歎曰「若復不爲無益之事，則安能悅有涯之生」是以愛好愈篤，近於成癖。每清晨閒景，竹窗松軒，以千乘爲輕，以一瓢爲倦，身外之累，且無長物，唯書與畫，猶未忘情。既頽然以忘言，又怡然以觀閱。）卷二「論鑑識收藏購求閱玩」*17

「書と畫のみ猶未だ情を忘れず。既に頽然として以て言を忘れ，又怡然として以て觀閱す。」と記されるような書畫への偏愛は，前代に著された繪畫収集の手引き書の中の言葉としては受け入れられることはあっても，士大夫の閑居生活における書畫金石へ向かう姿勢を述べた言葉としてはもはや許容され得ない時代へとうつりかわっていたのではないか。こうして見てくると，李清照「金石録後序」にあからさまに表現されていた歎喜，すなわち家庭内での収蔵品の賞翫に伴う歎喜は，同時代の士大夫の書畫金石に向かう態度とはほとんど相容れないものだといわざるを得ないのである。

三 婦人墓誌銘に見る家庭婦人

では次に，李清照が家庭内で発揮した賢さの表出について検討してみよう。それは家庭婦人の賢明さの文学的発現としては，どのような位置を占めるものであり得たのだろうか。

家庭における女性の存在意義をめぐる，中国で最初に総合的な認識が伝記というスタイルを借りて表現されたのが，前漢末の劉向が編纂した『列女伝』七巻百四篇である。『列女伝』第二巻賢明伝には，夫に対して賢明な補佐役となり，その役割を果たしながら外部の政治世界にも関わった賢妻たちの伝記十五篇が集められている。この十五篇は，西周宣王の后から隠者・楚の於陵子の妻まで，すべて夫に適切な助言を与えて彼を正しく導き，国や家に利をもたらし，内助の功を発揮する賢明さを備えた女性たちの伝記である。各篇で枢要な位置を与えられている賢妻たちの言葉は概ねどれも理念に傾いており，個々の夫妻がいかなる家庭を営んでいたかという細部を簡略なこれらの伝記から読み取ることは難しく，我々は著しく類型化した家庭婦人像をそこに見出すに過ぎない。だがここに表出された家庭婦人の類型は，文学的規範として強力な影響を長く広く与え続ける。嘉祐年間（1056-1063）のこと，皇室図書館で校訂に従事した曾鞏（1019-1083）は，この書が持つ同時代的意義を次のように記している。

後の世の学問に励む者は，多く外界の物に引きずられて自ら守るべきものを見失っている。家人も手本が見つからないから，邪な奢侈に狂奔する。内助が失われただけではない

のだ。自分に対していい加減で、利益を追い恥を犯していても、自らを省みることができない士大夫は、しばしばそれを家庭のせいにする。だから孟子は「身、道を行わざれば、妻子に行われず」と言ったのだ。本当にそうだ。このような者は、もともと高い地位は享受できる者ではないが、『詩経』の理想からも、また遠く離れている、まして天下に向かって立つ君主の器などでは全くないのだ。劉向が述べたものにこめられた、人を誘い戒める意図は、甚だ深遠なのである。(後世自學問之士、多徇於外物而不安其守。其家室既不見可法、故競於邪侈。豈獨無相成之道哉。士之苟於自恕、顧利冒耻而不知反己者、往往以家自累故也。故曰、身不行道、不行於妻子。信哉。如此人者、非素處顯也、然去二南之風、亦已遠矣、況於南鄉天下之主哉。向之所述、勸戒之意、可謂篤矣。)「列女傳目録序」*18

こうした理由から、宋代の士大夫にとって家庭をよく取りまとめた婦人は、文学作品の対象として選ばれるだけの価値を持ち得たのである。中国で無数に書かれた男性作者の手になる婦人墓誌銘の中には、『列女伝』のような抽象レベルを離れ、家庭の有様をある程度まで具体的に表出するものがある。前節で李清照に先立って書籍書画金石をめぐる発言を残している作者たちにもそうした文章があり、そこから彼らの家庭内の夫妻の関わりについての見解を知ることができる。まず彼らがとらえた家庭内部の様子がどんなものであったかを見てみることにしよう。

歐陽脩は、詩友であった梅堯臣(1002-1060)の要請を入れ、梅の亡妻、謝氏の墓誌銘を慶曆五年(1045)三十九歳の時に執筆した。二十歳で梅堯臣に嫁し、三十七歳で亡くなった謝氏が貴顕の家に生まれながら、貧窮に耐えて家族のために衣食を整え、夫に適切な助言を与えていかに正しく導いたか、その「性識は明るくして道理を知」る様を、梅堯臣自身が語った言葉として具体的に描き出そうと試みている。その中で具体的な家庭内の言動として書かれているのは次の部分である。

私が同僚と話していると、謝氏はたいていドアやついたての陰からそっと聞いて、合間にその人物の才能や賢愚それに時事の得失を批評したが、それらにはみな道理が備わっていた。私は呉興で役人として勤務していた頃、外から酔って帰ると、必ず『今日のお楽しみはどなたと一緒に飲まれたのことでですか』とたずねる。それが賢者であれば喜ぶが、そうでなかったら『あなたのお友達はみなさん当代の秀才がた、それなのにどうして卑屈なまねをされるのですか。道德第一であればこそ、付き合える方も多くはないのです、今あんな人と飲んでいて楽しいのですか』と嘆いた。(吾嘗與士大夫語、謝氏多從戶屏竊聽之、問則盡能商榷其人才賢否及時事之得失、皆有條理。吾官吳興、或自外醉而歸、必問曰『今日孰與飲而樂乎。』聞其賢者也則悅、否則歎曰『君所交皆一時賢雋、豈其屈己下之耶。惟以

道德焉，故合者尤寡，今與是人飲而飲邪。』）「南陽縣君謝氏墓誌銘」『居士集』卷三十六

歐陽脩が謝氏の墓誌銘を書いてから二十年の後，蘇軾は治平三年（1066）三十一歳の時，十六歳で嫁し，前年五月に亡くなった三歳年下の妻，王弗のために墓誌銘を書いた。妻が没したのは，蘇軾は最初の地方赴任となった鳳翔府での任を終え，都に戻ったばかりの頃であった。蘇家に嫁す前は父母に，嫁してからは舅姑に謹厳に仕え，淑やかでありながら優れた才知を身につけていた王氏の記念すべき言動とは，次のような鳳翔在任中の出来事だったと蘇軾は記す。

私，軾が鳳翔に赴任するのに同行し，私に外での用事があると，お前はいつもその詳細を尋ねたものだった。「あなたは親元を遠く離れているのだから，慎重にも慎重をお重ねにならなければなりません」と言い，毎日亡き父君が私に与えられた注意を語り聞かせるのだった。私が来客と表で話していると，お前はついたてに隠れてそれを聞き，戻るといつも会話を再現しては「この方は，ことごとに意見をはっきりさせず，ひたすらあなたの意を迎えておられました。もうこの人と言葉を交わす必要など無いのではありませんか。」と言った。訪ねてきて私と親しく付き合いたいという者があった。お前は言った。「恐らく長続きしないでしょう。人に進んで知られようとするのは，離れていくのも必ず早いものです。」果たしてその通りになった。亡くなる年，そのことばには傾聴に値するもの多く，まるで識者のようであった。（從軾官于鳳翔，軾有所爲於外，君未嘗不問知其詳。曰「子去親遠，不可以不慎。」日以先君之所以戒軾者相語也。軾與客言於外，君立屏間聽之，退必反覆其言曰「某人也，言輒持兩端，惟子意之所嚮。子何用與是人言。」有來與軾親厚甚者。君曰「恐不能久。其與人銳，其去人必速。」已而果然。將死之歲，其言多可聽，類有識者。）「亡妻王氏墓誌銘」『東坡集』卷三十九

蘇軾が妻のための墓誌銘を書いたのと同じ年，都で龍図閣直學士の職に就いていた四十八歳の司馬光は，蘇軾・蘇轍兄弟の要請を受け，彼らの原稿をもとに，彼らの母程氏の墓誌銘を書いた。程氏はこれより先十年嘉祐二年（1057）四月に亡くなり郷里に埋葬されていたのだが，彼らの父蘇洵がこの年に亡くなり，父の柩を郷里に送り届けるのを機に，この時まで無かった母のための銘文の執筆を司馬光に求めたのである。だから司馬光のこの文章には，程氏が夫に対しては賢妻であったばかりでなく，ようやく官界に身を立て始めた子供たちに対しては良母でもあった，という二つの内容が盛り込まれている。程氏の実家が嫁ぎ先の蘇家よりも富裕であったが，彼女はそれに驕らなかつたこと，気むずかしい蘇家の姑にも珍しく好かれたこと，こうした事柄を記した後，家庭内で夫と次のようなやりとりがあったと書

きつぐ。

父君は年齢が二十七に達してもまだ学問されていなかったが、ある朝慨然として夫人に「わしは自分でも今ならまだ学べると思うのだが、しかし我が家は私で生計を立てているから、学問すると生活が立ちゆかなくなる、どうしたものだろうか。」と言われた。夫人は「私は前々から申し上げようと思っておりました。一体どうしたらあなたを私に頼って学問に志すようにできるか。あなたにそのお志がお有りなら、生計は私に託していただいても構いません。」と言い、すぐさま衣服や嗜好品をすべて出し、それを売り払って生計に当てられた。数年ならずして富裕になり、父君はこれによって学問に専念され、ついには名声ある儒者になられたのである。(府君年二十七猶不學，一旦慨然謂夫人曰「吾自視今猶可學，然家待我而生，學且廢生，奈何。」夫人曰「我欲言之久矣。惡使子為因我而學者。子苟有志，以生累我可也。」即罄出服玩，鬻之以治生。不數年遂為富家，府君由是得專志於學，卒成大儒。)'蘇主簿夫人墓誌銘』『司馬公文集』卷七十六

蘇洵が二十七歳の時、それまでの素行を改め一念発起し学問に打ち込んだという故事は、十二世紀の人、曾季狸が「大体人が学問をするのに、遅い早いは問題ではない。高適は五十歳で詩を作り始め、老蘇は二十七歳で文章を作り始めたが、どちらも巧みになることに障碍とはならなかった。(大凡人爲學，不拘早晚。高適五十歳始爲詩，老蘇二十七歳始爲文，皆不害其爲工也。)'(『艇齋詩話』)と記録するように、恐らくごく早くから流布した晩学をめぐる逸事だったのであろうが、それが程氏の内助に依るものだと述べるのはこの司馬光の墓誌銘だけであって、歐陽脩「文安縣主簿蘇君墓誌銘」(『居士集』卷三十四)には「年二十七にして、始めて大いに発憤し、そのもと往来するところの少年に謝し、戸を閉じて書を読み、文辞をつくる。」と記されるだけであるし、張方平(1007-1091)「文安先生墓表」(『樂全集』卷三十九)にも、「年二十七にして始めて書を読み、一二年ならずして、諸老先生の右に出ず。」と述べるだけで、蘇洵が発憤に至った家庭内の事情には触れられていない。これは単に司馬光の文章が歐陽脩たちの文章よりも詳細に書かれているということではなく、この文章では理想の家庭婦人としてふさわしい細部を持つように意図的に仕上げられていると見るべきである。程氏墓誌銘では、夫を励まし発憤させたという逸事を記したあと、続いて程氏が古人の名声節義の物語を子供に聞かせて学問に導く一方、余分な富裕が子孫を墮落させる元凶だとして退けたという逸事を並べる。こうした事柄を盛り込む意図について、書き手自身が「婦人は柔順にして以てその族を睦ませるに足り、智能にして以てその家を斉えれば、これすでに賢なり。いわんや夫人のごときは、よく開発輔導して、その夫、子をして成就せしめ、皆な文学を以て天下に顕重たらしむ、識慮高絶にあらざれば、よくかくのごとくならんや。古

の人国を有し家を有すと称されし者、その興衰は閨門よりせざるは無し。今、夫人におけるや、益ます古人の信ずべきを見るなり。」とはっきり言明するように、程氏が蘇家の隆盛を招来するためにいかに自らの持てる賢さを発揮したかを表出することが、この文章では目指されているのである。司馬光は後年、家庭内道德教則本ともいべき『書儀』を編纂することになる*19けれども、程氏の墓誌銘はそうした士大夫の理想の家庭を表現しようとする一連の彼の営みに位置づけることができるだろう。

上に見た三篇の婦人墓誌銘は、類型的修辭法に安易に依存したおごりなりのものではない。三人の書き手それぞれが知り得たであろう婦人特有の資質を、その肉声に至るまでも生々しく書き表そうとする意図を持ち、その意図をかなりの程度まで実現できている優れた作品とすることができる。とりわけ、司馬光の程氏墓誌銘では、夫人の「夫を勉励し子を教育する」姿が具体的に書かれていて、婦人が士大夫の家で果たすべき重大な役割をきちんと主張し得ているところに新しさを感じさせもする。しかし、婦人の賢明さが夫を啓発勉励し、士大夫として世に立たせていくことに注目しようとする、表現に込められたそうした意図は、『列女伝』賢明伝に集められた賢妻たちの伝記に託されたものと大きく重なるばかりでなく、『列女伝』で提示された修辭法をも基本的に踏襲している。とりわけ、謝氏や王氏がドアの陰から外をのぞき見て、夫が応対している人物を批評しつつ夫を勉励する家庭婦人の形象は、春秋時代、齊の宰相晏子の逸話集『晏子春秋』の中のエピソードに依りつつ、晏子とその御者との立ち居振る舞いを批評して夫に奮起を促す御者の妻という古代から伝来した範型*20に由来するものであることが顕著であるが、そのことも『列女伝』への依拠を一層明示すると言えよう。

自らの賢明さを夫や子の教導に発揮する謝氏、王氏、程氏と、李清照の夫への向かい方とを比べると、その賢明さの現れ方が大きく異なっていることに気がつく。青州・帰來堂における食後の家庭の情景は、葉昌熾が蔵書家の楽しみを表現したものと見なしたように、「金石録後序」の中でも最も広く知られたくだけりである。李清照は自ら、自分が記憶力に優れる「強記」と記す。彼女は其の賢さを、夫と競うために使い、その競合の中に身を置いていることにこの上ない快樂を獲得したことを吐露する。同じ性質の快樂をゲームを通じて得たことが、「打馬」なる遊びを解説した次の文章でも回想されている。この文章が「紹興四年十一月二十四日」に、確かに李清照によって書かれたものであるとすれば、「後序」が書かれたのとはほぼ同じ頃に綴られていた回想として注目するに値する内容を持つ。

賢明さがあれば理解が行き届き、理解が行き届けば上達しないものはない。専一であれば精密になり、精密であれば巧妙にならざるものはない。だから古代の料理人丁の牛の解体、郢の人の斧の扱い、師曠の耳や離婁の目、大事なところでは帝王の堯や舜の思いやり

から桀や紂の悪事、小さなところでは豆でお椀の蠅に当てる技、頭巾で将棋の駒を払う技に至るまで、すべて道理を窮め尽くすまでになったのは、この巧妙さ故であったのだ。後の世の人は、聖人の道を学びながらその聖なるところまで到らぬばかりか、遊戯の事ですら、要領をつかめずに止めてしまう者が多い。勝負事とは他でもない、先陣争いなのであって、専一になりうる者だけができることなのだ。私は元来勝負事が好きで、勝負事といわれるものには全部親しんで、昼でも夜でも寝食を忘れるほどだった。日頃多い少ないはあれ負けたことがないのはどうしてか、それは精密であったからだ。南渡以後あちこち流浪しているうちに、勝負事の道具はすっかり無くなってしまい、それでほんのたまにしかしないが、それでもすっかり忘れ果ててしまったわけではない。(慧則通、通則無所不達。專則精、精則無所不妙。故庖丁之解牛、郢人之運斤、師曠之聽、離婁之視、大至於堯舜之大仁、桀紂之惡、小至於擲豆起蠅、巾角拂棋、皆臻至理者何、妙而已。後世之人、不惟學聖人之道不到聖處、雖嬉戲之事、亦得其依稀彷彿而遂止者多矣。夫博者無他、爭先術耳、故專者能之。予性喜博、凡所謂博者皆耽之、晝夜每忘寢食。但平生隨多寡未嘗不進者何、精而已。自南渡來流離遷徙、盡散博具、故罕爲之、然實未嘗忘於胸中也。)「打馬圖序」*21

書籍金石やゲームを対象とするばかりでなく、文章制作においても李清照はその才を発揮した。その方面の現れが、周輝(1127-?)が李清照の親戚から聞いた出来事として書き留めるように、詩想を得る毎に賡酬することをせがんで夫を閉口させるようなもの*22であったと聞かされても、それは確実に実際に起こりそうな事であるように思われてくる。こうして見てくると、李清照が備えていた優れた資質を指して賢明さであったと言うことはできるかもしれないが、「金石録後序」に表現された彼女の家庭での振る舞いは、同時代の賢妻の類型には収まらないと言うべきだ*23。しかし、この逸脱こそが、伝統的な賢妻を対象とする表現類型に伴う家庭の情景とは大きく異なる家庭の情景を、李清照「後序」が表出し得た第二の原因なのではなかったか。

四 愛着の記録と隠蔽

すでに第二節で指摘したように、『金石録』序で、蒐集が単なる享楽に終わるものではなく、同時代の士大夫に新しい歴史的知見を広く提供するところにこそ意義があると、著者趙明誠は強調していた。こうした態度は、恐らく『金石録』に収録されている跋尾、即ち遺物に関する解説文全体に通底しているであろう。その一例を挙げよう。友人の劉跂は、大觀二年(1108)春、泰山に登りこれまで知られていなかった秦代石刻を発見する。そして五年後の政和三年(1113)秋、彼はその篆字百四十六字を獲得、持ち帰った。劉跂は早速それをもとに一書『秦

『山秦篆譜』を編み、同時にこの収穫を趙明誠にも提供した。劉跂はさらにその四年後に執筆した「金石録後序」にも、自らのこの発見を誇らしげに書き加えている。趙明誠も『金石録』所収の金石遺物二千点の一つとして登録するとともに、その解説文を付した。解説文には、この遺物はこれまで存在を知られておらず、大觀年間に劉跂が自ら獲得したもので、司馬遷『史記』秦本紀に載せる石刻のテキストを大幅に改訂する画期的な意義を有すると順に述べたあと、次のような言葉が書き加えられた。

これは皆、歴史家の誤りを正すに足るものである。そうするとこの碑文を貴ぶべき点は、ただその字画を鑑賞して楽しむばかりではないのだ。（皆足以正史氏之誤。然則斯碑之可貴者、豈特玩其字畫而已哉。）『金石録』巻十三「秦泰山刻石」跋尾

遺物の検討、歴史的意義の顕彰に先立って、蒐集者は遺物の発見獲得に伴う興奮歓喜をまず最初に体験するはずである。しかしこの言葉には、新発見の貴重な石刻を獲得した歓喜を抑制しようとする思いが滲んでいる。『金石録』の整理公刊に当たっては、李清照の手も加わっているはずだが*²⁴、現在伝えられている『金石録』諸本の跋尾の中には、貴重な遺物を獲得した喜びが直截に述べられている箇所を見いだすことはできない。だが、李清照の「後序」には、発見によって引き起こされた興奮や鑑賞に伴って生じた歓喜が、ためらうことなく表出されていた。そのような李清照「後序」の性格に極めてよく似た文章が、『金石録』とは別に伝えられている。それは清末の学者・蒐集家であった繆荃孫（1844-1919）が記録するもので*²⁵、唐の白居易の筆になる『楞嚴經』一百幅三百九十七行に付された次のような趙明誠の跋尾である。

淄川の邢□氏の集落は、丘陵が平らに広がり、水べの木立は美しく、垣根や山裾と痩せ地が入り組んでおり、隠れた君子が住まいするのではないかと思われた。尋ねてみると、この村全部が邢という姓、なかでも邢有嘉さんは、前の村長、礼を好む、そこで住居に行った。庭には折しも花咲き乱れていた。主人が出迎えてくれ、私がここの知事であるというのも気にせず、私の普段の心がけの評判を重んじてくれた。夏の初めに立ち寄った時、やっと白楽天の手になる楞嚴經を見せてくれた。それで馬に乗って馳せ帰り、妻と二人で鑑賞した。その時すでに夜の十時をまわっていた。酒を飲んでのどが渴いたので、小龍団の茶をたて、二人向かい合わせで広げて見たが、あふれる喜びを抑えられず、ロウソクを二本灯し終わっても、まだ寝付くことが出来ず、そこで筆を執って記録をしたためたのである。趙明誠。（淄川邢□氏之邨、丘地平瀾、水林晶滄、牆麓礪确布錯、疑有隱君子居焉。問之、茲一村皆邢姓、而邢君有嘉、故潭長、好禮、遂造其廬。院中繁花正發。主人出接、

不厭余爲茲州守，而重余有素心之馨也。夏首後相經過，遂出樂天所書楞嚴經相示。因上馬疾驅歸，與細君共賞。時已二鼓下矣。酒渴甚，烹小龍團，相對展玩，狂喜不支，兩見燭跋，猶不欲寐，便下筆爲之記。趙明誠。）繆荃孫『雲自在龕隨筆』卷二

この由来の不透明な記事は、『金石録』の跋尾としては適正でない内容を持つばかりでなく、筆遣いにもどこか作為を感じさせる。繆荃孫は、この文章から趙明誠夫妻が二人で遺物を鑑賞するさまが想像できる（此冊想見趙德夫夫婦相賞之樂）と評したが、確かに蒐集家の興奮と歓喜を好く伝える記事ではある。しかし、結局『金石録』にこの類の文章は載せられることはなかった。この文章が確かに趙明誠自身のものかどうかは判定できないけれども、李清照「金石録後序」が妻の立場から表現しようとしたものを夫の立場から述べて見ればどうなるかと考えて、その例示として読む限りにおいては甚だ示唆に富むと言えるだろう。

ここまで検討してきたことによれば、家庭の内部においては、自らの精力と知恵を活用して獲得した物をめぐって競い合う一連の行為に没入することができ、さらにこの一連の過程に熱中することから生起する喜びを享受できる、李清照の「金石録後序」にまず読み取るべきものは士大夫家庭に見いだせるこうした歓喜の情景であった。「金石録後序」で表出しようと試みられたものは、単に夫婦相愛の円満な家庭の描写に止まるものではなく、才知有る婦人にして初めて享受し、かつ表出し得た情景であった。李清照は、自分の賢さを大いに発揮し、家庭で夫をかけがえのないパートナーとして新たな歓喜を得たことを誇り、さらにその歓喜が家庭の崩壊とともに無惨に失われてしまったことを傷み、自分が体験した歓喜と悲傷を、亡夫の著書のあとがきという媒体を借りて表出したのである。我々が読んだのは、物に向かう態度と、家庭における婦人の位置、というこの二重の表現に関する抑制を突き破って実現した、極めて稀有な表現行為の結晶だったとすることができるだろう。

しかしこうした婦人の賢明さの表現行為への転換は、すでに許容され難いものになっていたようだ。これよりも早く、道学者としての名声を得た程頃は、元祐五年（1090）亡き母の伝記を書き、その中で理想の家庭婦人のあり方を示した。そこでは下に見るように、文芸に現れ出るような婦人の才知の発揮のし方が退けられ、母がひたすら家政への献身や子弟の養育に専念したことが称揚されている。

夫人は文章を好まれたが、詩文を作られることはなかった。世の婦女が文章書簡で名が世に知れるようなのは、深くこれをよからぬこととされた。生前に作られた詩は、三十篇に満たず、それも皆な今では失われた。ただ記憶しているのは歴陽におられた時、父君が河朔に視察に出られ、夜なか雁の鳴き声を聞いて、次のような詩を作られたが、そこには「いづくにか驚き飛び起ちて、ようようと草堂を過ぎる。つとにこれ愁いてねむること無

く、忽まち聞けば意はうたた傷つけり。良人は沙塞の外にあり、羈妾は空房を守る。迴文の信を寄せんと欲すれども、誰か能く汝が持て行くに付せんや」とあった。歴史書を読むときは、姦邪逆乱の事件が目に触れるたび、いつも本を置いて憤懣やるかたない様子、忠孝節義の士を見ると、賛嘆やむことがなかった。ことに唐の太宗が異民族の侵入を食い止めた策については、その見識思慮がはなはだ高邁で、英雄の気概のあるものと言われた。夫人の弟君は世の名儒と言われた人で、才能見識はなはだすぐれたが、いつも自分で夫人にはかなわないと言われていた。（夫人好文、而不爲辭章、見世之婦女以文章筆札傳於人者、深以爲非。平生所爲詩、不過三十篇、皆不存。獨記在歷陽時、先公觀親河朔、夜聞鳴鴈、嘗爲詩曰「何處驚飛起、誰離過草堂。早是愁無寐、忽聞意轉傷。良人沙塞外、羈妾守空房。欲寄迴文信、誰能付汝將」讀史、見姦邪逆亂之事、常掩卷憤歎、見忠孝節義之士、則欽慕不已。嘗稱唐太宗得禦戎之道、其識慮高遠、有英雄之氣。夫人之弟可世、稱名儒、才智甚高、嘗自謂不如夫人。）「上谷郡君家傳」『河南程氏文集』卷十二*26

「彼の文辞のみを以てする者は、陋なるかな。」（周敦頤『通書』陋篇）という言説で代表されるように、宋代道学者はことに文学偏執を貶めるが、こうした見方が士大夫から提示されるようになった後の社会では、家庭内の知的なゲームを楽しむだけとは言え、物に執着する婦人は批判の対象となる傾向があっただろう。実際、李清照に対する同時代十二世紀の男性評者からの批評にはそういう性格のものが多し。彼らの批判が、李清照の文芸そのものに対するものでなく、むしろ彼女の妻としての素行に向けられているのにも注目させられる。そうした例をいくつか示しておこう。

王灼は、李清照が長短句（詞）の作者として顕著な才能を発揮したことを認めつつも、その余りに放恣な作詞態度を再嫁の履歴に重ね合わせてこう批判する。

易安居士は、京東路提刑の李格非、字は文叔の娘、建康太守趙明誠、字は德甫の妻である。若いときから作詩に名声あり、才力量は華麗にして豊富、先輩に肉薄する。士大夫の中でも比肩する者多くなく、我が宋朝の婦人中では、文彩第一に推さなくてはならない。趙が死ぬと、某氏に再嫁したが、訴訟沙汰のすえこれと離婚した。晩年、その節義はすっかり失われた。長短句の製作では、くまなく人の意を尽くすことが出来、輕妙にして斬新、さまざまな意匠が尽きることがなかった。しかし古代よりこのかた士大夫の家庭で能文の婦女として、彼女ほど自重しないものはない。（易安居士、京東路提刑李格非文叔之女、建康守趙明誠德甫之妻。自少年便有詩名、才力華瞻、逼近前輩。在士大夫中已不多得、若本朝婦人、當推文采第一。趙死、再嫁某氏、訟而離之。晩節流蕩無歸。作長短句、能曲折盡人意、輕巧尖新、姿態百出。自古搢紳之家能文婦女、未見如此無顧籍也。）『碧鷄漫志』卷

二「易安居士詞」

同時代の詩詞評論家、胡仔も、李清照が制作した佳句を記録する一方で、再嫁に言及し非難を加える。

近頃の婦人のなかで、詞のジャンルで才を現したのものには李易安がおり、すこぶる佳句が多い。小詞に「昨夜 雨は疏らにして風は驟かなり、濃き睡りも残んの酒を消さず。試みに簾を捲く人に問わば、却って道う海棠は旧のままなりと。知るやいなや、知るやいなや、まさにこれ緑肥え紅瘦せるとき。」(如夢令)という。「緑肥紅瘦」のこの語は甚だ新しい。また九日の詞にいう「簾の西風に捲かるとき、人は黄花の瘦せたるに似たり。」(醉花陰)この語もまた婦人では得難いものである。易安は張汝舟に再嫁し、幾ばくならずして反目し、綦處厚に申し文を差し出し、その中で「猥りに桑榆の晩景を以て、この駟僮の下材に配す。」と述べた。これを伝え聞いた者はみな苦笑した。(近時婦人、能文詞如李易安、頗多佳句。小詞云「昨夜雨疏風驟、濃睡不消殘酒。試問捲簾人、却道海棠依舊。知否、知否、應是綠肥紅瘦。」(如夢令)「緑肥紅瘦」此語甚新。又九日詞云「簾捲西風、人似黃花瘦。」(醉花陰)此語亦婦人所難到也。易安再適張汝舟、未幾反目、有啓事與綦處厚云「猥以桑榆之晩景、配茲駟僮之下材。」傳者無不笑之。)『茗溪漁隱叢話』前集卷六十「麗人雜記」

蔵書家、晁公武はその書目『郡齋讀書志』の別集類に李易安集十二巻を録し、次のような解題を付す。

右はわが朝の李格非の娘である。幼くして文才に恵まれた。先に趙誠之に嫁した。舅に当たる正夫は徽宗皇帝の頃に宰相となり、李氏はその時、舅に詩を献呈して「手を炙れば熱かるべくも心は寒かるべし」と述べた。しかしながら身を正し貞操を守ることが無く、後に張汝舟に嫁したが、晩節を全うせず、南方をさすらったあげくに亡くなった。(右皇朝李格非之女。幼有才藻名。先嫁趙誠之。其舅正夫相徽宗朝、李氏嘗獻詩曰「炙手可熱心可寒」然無檢操、後適張汝舟、不終晩節、流落江湖間以卒。)

このように、李清照が文才には恵まれていたのは否定し得ないが、その才知を正しく使うことが出来ずに、貞淑という徳性を備えることができなかつた婦人であると、王灼ら男性評者はそろって見なしているのである。この頃、陸游(1125-1209)は紹熙四年(1193)に、いとこの孫綜のために、その年の七月に五十三歳で亡くなった彼の娘の墓誌銘を書き与えた。そこで陸游は、孫氏が僅か十歳余りの時、その優れた資質を見込んだ李清照から学問を授け

よとの申し出を受けたが、孫氏は「詩文の才は女性には必要ありません」といってその申し出を拒絶し、それを奇とした父が手ずから古代の優れた女性たちの伝記数十篇を書き娘に授けた、と書き加えている*27。陸游自身が李清照を如何に評価していたかは、この文章からははっきりとは分からないけれども、李清照の文才が広く知られると同時に、彼女の才知の発現の様相が早くも同時代の士大夫たちにとって望ましいものではないと認識されるに至っていたことが、ここからも推測される。

こうした同時代士大夫の李清照像を、明代読書人の郎瑛は一体どのように継承しているのだろうか。それを克明に跡づけることは容易ではないが、彼の婦女に対する見方に限れば、読書ノートに関連する記事をさらに見いだすことができる。始めに見たように、彼は「後序」に趙明誠と李清照との円満な家庭生活を読み取って、それに共感を示しつつも、同時に李清照の再嫁に不満を漏らしてもいた。彼は晉書卷九十六の列女伝に関する批判も書き残しているが、そこには晉書列女伝の伝主の採択基準が非常に誤っておりとても受け入れられないと、次のような不満が書き付けられた。

晉書の列女伝中には三十人ほどが収録されているに過ぎないのに、家内で婦人としての礼に悖る者が四人もいる。その他の者も知識明敏才能豊富ではあっても、一事一芸に優れるに過ぎない。陶侃や周凱の母にしたところで、賢と称すれば足り、これらを烈ということとはできない。王渾の妻の鍾琰のような者*28をその後に置いているが、全く極めて恥ずべきことだ。王凝之の妻の謝道韞は常々夫を面白からず思っていて、叔父の謝安に何の後侮をしているのかとたしなめられた。また、義理の弟が客と談義勝負に負けそうになったと見るや、小間使いをやって「あなたを包圍からお救いします」などと言わせた。後に夫の仇を討ちついには捕虜になったとは言うけれども、遂に節義に殉じたとは聞かない。こういった事が婦人のすることだろうか。竇滔の妻の蘇若蘭は、夫が妾を取ったのに嫉妬すること甚だしく、夫がそれで怒って離縁した*29、そこで回文の詩を錦に織り込んで贈り夫を感動させた、文章は新奇にして巧妙かもしれないが、こんなものが女性の徳だろうか。涼武昭王李玄盛の皇后尹氏などに至っては再婚者だ、こんな者まで列女に収録している。私には全くわけが分からない。(其列女傳中所収不過三十，而無中閨之禮者四人焉。餘或識明才膽，不過一事一藝之美。雖陶侃，周凱之母，可稱曰賢而已，謂之曰烈可乎。王渾妻鍾琰已載之於後，實可恥之甚。王凝之妻謝道韞每不樂夫，致謝安責以何恨之言。且聞叔與客談不勝則遣婢白之，「欲爲小郎解圍」。後雖爲夫報讎被擄，又不聞其死節。諸豈婦人事耶。竇滔妻蘇若蘭因夫取妾妬忌特甚，夫怒棄之，則織錦迴文以感動之，文雖奇妙，又豈女人之德耶。至於李玄盛之后尹乃再醮之婦，亦取入列女。吾則不知何謂也。)'『七修類稿』卷十五 義理類「晉史列女傳未當」

郎瑛の不满は、いうまでもなく晉書列女伝にはいわゆる「三従」にかなうような貞淑な妻、節義に殉じた婦人が載せられていないことに端を発している。その中でも、名指して非難された謝道韞らは、僅かな才知を間違った方向に現した者たちであるに過ぎず、徳義や貞節に全く関わりがない者たちと貶められている。ところが、ここで貶められた謝道韞ら四人の特徴は、多く李清照「金石録後序」にも読み取ることができるものではないのか。郎瑛の時代、明代にはどのような理想の家庭の情景が思念されたのか、夫婦はどのような家庭生活の楽しみを求めていくことになったのか。こうした疑問にいま答える余裕はないが、郎瑛の意見を総合して見る時、明代の士大夫の趣味としてはいかにも好ましい古物蒐集、読書や批判の営み、そうした男性の家庭内での精神的営みがあり、その一方で夫のそうした営みをかいかいしく助ける貞順な妻の姿が思念されているのではないだろうか。郎瑛は李清照をそうした貞順な妻のモデルと見ようとしたのではないかと推測される。彼の「金石録後序」の読みは、李清照の表現行為のねらいや創造性を正しく理解したものとは言えないけれども、一面においては彼が生きた時代の雰囲気を実に忠実に反映するものであったのかもしれない。

注

- * 1 清の俞正燮「易安居士事輯」（『癸巳類稿』所収）を始めとし、現代の王仲聞「李清照事迹編年」（『李清照集校註』所収）や陳祖美『李清照評伝』（1995年、南京大学出版社）などでも基本的に同じである。
- * 2 テキストは上海師範大学古籍整理組校点『容齋隨筆』（1978年、上海古籍出版社）による。pp.667-669。
- * 3 テキストは、基本的に王仲聞が四部叢刊所収呂無黨抄本によりつつ校訂したもの（1997年、北京、人民文学出版社『李清照集校註』再版本所収）に従い、徐培均『李清照集箋注』（2002年、上海古籍出版社）を参照した。
- * 4 王仲聞は「春三月、奔太夫人喪南來。」の後、一本に空白を置くものがあることを指摘し、「此処文氣不接、意義不明、必有闕文。」と言う。また、今「お上が買上げられる」と訳した「頒金」の語も、意味するところ不明とする。王曾瑜「李清照事迹七題」（『中華文史論叢』第六十五輯、2001年、上海古籍出版社、所収）は、趙明誠の没後、時の権力者、王繼先と李清照との間に古器をめぐる係争があったと指摘する。今、それを参考にして解した。
- * 5 テキストは歴代筆記叢刊『七修類稿』（2001年、上海書店出版社）による。174頁。
- * 6 早くは、朱熹の「本朝夫人能文、只有李易安與魏夫人、李有詩……如此等語、豈女子所能。」（『朱子語類』卷一四〇）という詩句の評価に現れている。円満な結婚生活を「後序」から読み取る態度は、中国科学院文学研究所中国文学史編写組『中国文学史』（1962）の「她生長和生活在学习、文芸空气都十分浓厚的家庭裏、而且婚姻也是美满的。」にも受け継がれているように思われる。
- * 7 テキストは『古逸叢書』三編所収北京図書館蔵南宋刻本による。
- * 8 テキストは金文明校證『金石録校證』（1985年、上海書画出版社）による。
- * 9 「與蔡君謨求書集古録目序書」（『居士外集』卷二十）に「蓋自慶曆乙酉（五年、1045）、逮嘉祐壬寅（七年、

1062), 十有八年, 而得千卷。顧其勤至矣。然亦可謂富哉。竊復自念, 好嗜與俗異馳, 乃獨區區收拾世人之所棄者, 惟恐不及, 是又可笑也。因輒自敘其事, 庶以見其志焉。」と言う。

*10 歐陽脩のテキストは李逸安点校『歐陽修全集』(2001年, 北京, 中華書局)による。

*11 「六一居士伝」については, 川合康三『中国の自伝文学』(1996年, 東京, 創文社)「III かくありたい我れ」に, 陶淵明の「五柳先生伝」に連なる自伝という立場から分析が加えられている。

*12 こうした自己規定は, これよりも早く嘉祐二年(1057)の作とされる「迂書」で定義が試みられていた。

*13 テキストは『全宋文』(1992年, 成都, 巴蜀書社)第二十八冊卷一二二四, 585頁により, 宋版本『増広司馬温公全集』(1993年, 東京, 汲古書院)卷九十九所載のものをあわせ見た。

*14 李清照の父, 李格非の著した「洛陽名園記」(邵博『邵氏聞見後録』卷二十四～二十五所引)に「司馬公在洛陽自號迂叟, 謂其園曰獨樂園。園卑小, 不可與他園班。(中略)公自爲記, 亦有詩行於世, 所以爲人欽慕者, 不在於園爾。」と記されている。

*15 テキストは, 内閣文庫所蔵宋刊本『東坡集』(1991年, 東京, 汲古書院景印)により孔風禮点校『蘇軾文集』(1986年, 北京, 中華書局)をあわせ見た。

*16 前掲『東坡集』卷三十二「超然臺記」。

*17 テキストは, 小野勝年校訂のもの(1938年, 岩波文庫)による。

*18 テキストは陳杏珍ほか点校『曾鞏集』(1984年, 北京, 中華書局)による。卷十一。

*19 清, 顧棟東『司馬温公年譜』は『書儀』の完成を元豐四年(1081)に繋げる。この年, 司馬光, 六十三歳。

*20 劉向『列女伝』賢明伝「齊相御妻」。

*21 テキストは王仲聞校訂のものによる。

*22 周輝(1127-?)『清波雜誌』卷八「中興頌」に, 「浯溪中興頌碑, 自唐至今, 題詠實繁。零陵近雖刊行, 止會粹已入石者, 曾未暇廣搜而博訪也。趙明誠待制妻易安李夫人, 嘗和張文潛長篇二, 以婦人而廁衆作, 非深有思致者能之乎。(引浯溪中興頌和張文潛二首)頃見易安族人言, 明誠在建康日, 易安每值天大雪, 即頂笠披蓑, 循城遠覽以尋詩, 得句必邀其夫廣和, 明誠每苦之也。」と記す。

*23 清の李調元は, 李清照「打馬賦」の「故逸牀大叫, 五木皆盧, 瀝酒一呼, 六子盡赤。平生不負, 遂成劍閣之師, 別墅未輸, 已破淮淝之賊。」の行を引き, 「意氣豪邁, 殊不類巾幗中人語。」と評し(『賦話』卷五), 婦人に似つかわしくない措辞であると指摘している。

*24 金石録は, 紹興年間に李清照によって朝廷に上奏された。また同時代人, 張端義は「易安居士李氏, 趙明誠之妻, 金石録亦筆削其間。」と記す(『責耳集』卷上。)

*25 褚斌杰ほか編『李清照資料彙編』(1984年, 北京, 中華書局)所載のテキスト(pp.151-152)による。

*26 テキストは王孝魚点校『二程集』(1981年, 北京, 中華書局)による。この文章については, 拙稿「古文と母」(『日本中国学会報』第五十三集, 2001年)でも言及した。

*27 陸游「夫人孫氏墓誌銘」(『渭南文集』卷三十五)紹熙四年(1193), 陸游六十九歳の作。

*28 これは, もし夫の弟と結婚していたらもっと賢い子を得ただろうと鍾氏が夫に向かって軽口を放ったことを指している。もと, 『世説新語』排調篇に載せる記事。

*29 晉書列女伝にはこの離縁の事を載せない。これは, 則天武后「織錦迴文記」(『文苑英華』卷八三四)に詳しく語るところに基づいている。

家庭の情景——西上

(付記) 本稿は、平成十二年度から十四年度にわたって科学研究費補助金の交付を受けた、基盤研究(C)(1)「中国における家族に関する文学表象の展開についての基礎的研究」(課題番号12610463)による研究成果の一部である。

Scenes of the home

— A study on Li Ch'ing-chao's postscript of the Jin shi lu (Record of stone and metal)

NISHIGAMI Masaru

Li Ch'ing-chao (1084-ca. 1151) is the daughter of a distinguished man of letters. She became the daughter-in-law of a minister of state in marrying Zhao Mingcheng, a minor official who was an antiquarian, a book collector, and an epigrapher. The Jin shi lu is a monumental catalogue of stone and bronze objets d'art constituting a resource of considerable archaeological interest. She added a postscript after Zhao's death. The conventional picture of Li Ch'ing-chao was made on the reading of her prose. This picture is that she and her husband led an ideal life of shared intellectual pursuit in the north land and that her lot was one of unrelieved misery after he died.

But this picture was made up from many reader's hopes. We would place this prose relative in the whole literary surroundings, we could find another significance from it. I tried finding it in my essay.